様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１４日現在

機関番号：８２６２１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０３２００２７
研究課題名（和文）　１９６０～７０年代のビデオ・アート：作品の所在調査とデータ・ベース構築
研究課題名（英文）　Video Art in the 1960s and 1970s - Location of Works and Creation of a Database
研究代表者
中林　和雄（NAKABAYASHI KAZUO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・企画課・企画課長
研究者番号：50217816

研究成果の概要（和文）：以後の社会・文化生活に多大な影響を及ぼすこととなる「ビデオ」というメディアの出現が、1960～70 年代の美術動向に及ぼした影響の重要性について、その体系的検証の端緒を開くべく、（1）当該分野に関わる基礎資料（文献、写真、書簡など）の収集とリスト化、（2）作家・関係者の証言の記録、（3）作品の所在調査およびデジタルデータ化、といった実証的調査を進め、その成果を反映したデータベースを構築した。

研究成果の概要（英文）：The appearance of the medium called “video” had a great influence not just on social and cultural life but also on the artistic trends in the 1960s and 1970s. In order to pave the way for systematic examination of the importance of the latter, we have created a database based on empirical research including: collection and organization of related basic materials such as literature, photographs and letters; documentation of verbal evidence from artists and people concerned; and location and digitization of works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
２００９年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
２０１０年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
総　計	13,000,000	3,900,000	16,9000,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：芸術学、美術史、ビデオ・アート、１９７０年代、映像表現、戦後美術、メディア、美術館

１．研究開始当初の背景

本研究は、ビデオを中心とした映像メディアの出現が 1960～70 年代の美術動向に及ぼした影響に注目し、その検証のための基盤となる資料整備を目指して開始された。
美術家の多くが数年間という一過性の形でしかビデオやフィルムに携わらなかったといった事情もあいまってか、日本におけるこの領域に関する調査・研究は、これまで継続的に進展してきたとは言い難い。まとまったかたちで検証がなされたのは、1988 年に目黒区美術館で開催された「現代美術としての映像表現」に関わる正木基氏の調査が最初である。しかしその後は「第 3 回ふくい国際ビデオ・ビエンナーレ」（1989 年、福井県立美術館ほか）における西嶋憲生氏による調査、天

野一夫氏による「ビデオ・新たな世界：そのメディアの可能性」(1992 年、0 美術館)、西村智弘氏が『月間あいだ』に連載した「日本実験映像史」(2004－2006 年)、阪本裕文氏による「初期ビデオアート再考」(2006 年、名古屋市民ギャラリー矢田）など重要な仕事が数例あるものの、調査・研究はやや散発的なものに留まってきた。
このような現況の主たる要因の一つは、ビデオ、フィルムといった映像作品の実見の困難さにある。絵画、彫刻といったメディアに比して、映像研究においてもっとも大きな障害となってきたのは、「動画（ムービング・イメージ)」という特性ゆえに、図版（静止画）にアクセスするだけでは充分な情報を得られないという点であった。テープの度重なる規格変更や、保存環境の悪さによる素材の劣化など様々な原因によって、現在、60～70 年代の映像作品を多くの人が自由に実見することは驚くほど、難しくなっている。

２．研究の目的
「１．研究開始当初の背景」に記した現況に鑑みて、本研究においては、1960～70 年代に美術家が制作したビデオ、フィルム作品について、これまでまとまった形で行われることのなかった実証的な調査・研究を進め、当該分野の体系的研究に必要な基盤資料体を用意することを目的とした。具体的には、以下 3 つの目的が設定された。

（1）これまで行われてきた当該分野の調査・研究を体系的にまとめなおし、また補完すべき関係者からの証言を新たに記録することで、当時の実態を俯瞰することが可能な資料を整備する。

（2）映像作品の多くは作家の手元に残っており、最適な環境で保管されているとは言い難い。調査によって作品の所在をつきとめ、クリーニングやデジタル化を中心としたフィルム、ビデオ作品の保存作業を行う。

（3）作品動画の閲覧が可能なデータベースを構築する。これにより、多くの研究者にとって作品へのアクセスがきわめて容易になる。このアクセシビリティの向上によりはじめて、作品の具体的、実証的分析が可能となり、当該分野の研究が質、量ともに発展することになると思われる。

３．研究の方法
「２．研究の目的」に記した 3 つの目的の達成のために、以下のような方法によって研究を進めた。

（1）資料集積｜当該分野における論評、カタログなどの基礎文献に関する充分なリスト整備がいまだなされていないという状況のため、紙媒体を中心にした資料の網羅的集積およびそのリスト化の作業に努めた。

（2）作家・関係者の証言の記録｜関係者の証言が充分には記録されておらず、現存作品の把握も覚束ないという状況から、当時、積極的にビデオ、フィルム作品を制作した作家および関係者を中心にインタビューを行い、その記録を整理・保存した。

（3）作品のデジタルデータ化｜上記インタビューなどを通じ所在が判明した映像作品を集積し、作品の保存や将来的な公開に不可欠な、ビデオおよびフィルム作品のクリーニング作業、修復作業、およびデジタルデータへの変換作業を行った。

（4）データベース構築｜最終段階として、1960～70 年代の美術家によるビデオ、フィルム作品の研究には必須の、作品の動画閲覧が可能なデータベース構築を行った。

４．研究成果
（1）資料集積｜1960～70年代のビデオ、フィルム作品に関して、主要関連文献を集積し、コピー、スキャニングの上、リスト化作業を行った。また当該分野の先行研究者である西嶋憲生氏（多摩美術大学）や正木基氏（目黒区美術館）所蔵の資料や、関係作家が所蔵する資料を借り受け、コピー、スキャニングの上、リスト化した後、内容を調査した。
調査期間中に収集した資料は関連展覧会のカタログやチラシ、ポスター、および雑誌、書簡、記録写真など多岐にわたった。特に当時の状況を直接的に知る手がかりとなる書簡や記録写真などが発見されたことは意義深い。この分野に特化した資料の集積やリスト化はほとんど行われていない。効率的な研究を可能にする基礎資料となることが期待される。

（2）作家・関係者の証言の記録｜調査・研究期間中、当該分野に関わる作家、関係者約40名にインタビューを行い、当時の制作状況や社会背景、作品の所在、これまでの研究成果などに関する情報を得た。当事者の証言を記録したこのインタビューは、将来的な公開を念頭に置いており、今後の研究に際して重要資料のひとつとなることが予想される。

（3）作品のデジタルデータ化｜主に(2)のイ

ンタビューを通じて関係を持った作家から、現存するビデオ、フィルムを借り受けた。専門業者の協力を得て、それらの作品のクリーニング、修復、デジタルデータ化（デジタルベータカムへの変換）を行った。調査・研究期間中にデジタル化を行った作品の数は、総計約200点となった。

（4）データベース構築｜上記(1)、(2)、(3)の調査で得られた資料からなるデータベース「eizo｜1960-1970 年代の日本における美術家のフィルムとヴィデオ」の構築を行った。なにより、デジタル化を行った 200 点の作品のうち、作家の了承を得た約 140 点の動画閲覧ができることが最大の特徴である。
今回の調査において 1960～70 年代に制作された多くのビデオ、フィルム作品を実見する機会を得ることで、それらの作品にはラディカルな発想や実験精神、大胆な批評性と若さゆえの自由さが満ちており、今日さまざまに抑圧的な状況下で萎縮しがちな美術表現とは著しい対照を成していることが再認識された。データベースの公開が、1960～70 年代の映像作品への関心や評価を促進し、また今後の研究の進展に必須の資料となることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①三輪健仁、不純なる媒体―1970 年前後の映像について、ヴィデオを待ちながら―映像、60 年代から今日へ（東京国立近代美術館）、査読無、2009、11-37

②大谷省吾、星座をつくる人、河口龍夫展言葉・時間・生命（東京国立近代美術館）、査読無、2009、8-12

③保坂健二朗、YCAM での中谷芙二子＋高谷史郎、「すばる」2010 年 11 月号、査読無、2010、310-311

④三輪健仁、「（表）面」的思考｜「1970 年 8 月 現代美術の一断面」展について」、「なにかいってくれ いま さがす―半影のモンタージュ」報告書（港区アート・アーカイヴ＝地域芸術資源採掘プロジェクト MARM 事務局）、査読無、2010、頁付無

〔学会発表〕（計８件）
①三輪健仁、ふりつけのふり――記録される身体／記録する身体、近畿大学国際人文科学研究所東京ｺﾐｭﾆﾃｨｶﾚｯｼﾞ「批評（創造）の現在シリーズ――4」、2009 年 10 月 3 日、四谷アート・ステュディウム

②牧口千夏、「第三の記憶」としてのオーラル・アート・ヒストリー、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ公開ワークショップ「オーラル・ヒストリーと戦後美術の理解」、2010 年 2 月 6 日、広島市立大学

③松本透、メディア芸術とミュージアム、第 13 回文化庁メディア芸術祭、2010 年 2 月 12 日、国立新美術館講堂

④三輪健仁、造形作家による「映像表現」について、東京藝術大学大学院映像研究科、2010 年 11 月 10 日、東京藝術大学

〔図書〕（計１件）
①大谷省吾, 他、東京パブリッシングハウス、実験工房―メディアの交差点、2010、168

６．研究組織
(1)研究代表者
中林　和雄（NAKABAYASHI KAZUO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・企画課・企画課長
研究者番号：５０２１７８１６

(2)研究分担者
三輪　健仁（MIWA KENJIN）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・企画課・主任研究員
研究者番号：５０３５６２７６

松本　透（MATSUMOTO TOHRU）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・副館長
研究者番号：９０１５００４４

大谷　省吾（OTANI SHOGO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・企画課・主任研究員
研究者番号：９０２７０４２０

保坂　健二朗（HOSAKA KENJIRO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・美術課・主任研究員
研究者番号：４０３３２１４２

蔵屋　美香（KURAYA MIKA）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・美術課・美術課長
研究者番号：３０２６０００３

鈴木　勝雄（SUZUKI KATSUO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・美術課・主任研究員
研究者番号：３０３２１５５８

水谷　長志（MIZUTANI TAKESHI）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・企画課・主任研究員
研究者番号：５０１８１８８９

河本　信治（KOMOTO SHINJI）
独立行政法人国立美術館　京都国立近代美術館・学芸課・特任研究員
研究者番号：１０１５００６２

牧口　千夏（MAKIGUCHI CHINATSU）
独立行政法人国立美術館　京都国立近代美術館・学芸課・研究員
研究者番号：９０４４３４６５

室屋　泰三（MUROYA TAIZO）
独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館・主任研究員
研究者番号：３０５３７３２９

(3)連携研究者
岡田秀則（OKADA HIDENORI）
独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館フィルムセンター・主任研究員
研究者番号：３０３００６９３